大阪市における市民に好まれる風景構造に関する研究

A Study on the Favored Scenery Structure of Citizen in Osaka City

王 蕊* 下村 泰彦* 加我 宏之* 増田 昇*

Rui WANG Yasuhiko SHIMOMURA Hiroyuki KAGA Noboru MASUDA

Abstract : This study was carried out to seek the favored scenery structure of the city dwellers in Osaka City by analyzing the relationship between the scenery and the landform or the land use. As a result, the following becomes clear. First, even if the city accumulation is remarkable in downtown of Osaka, the space composed of natural elements such as the woods, the row, the surface of the water and so on is important. Second, in the commercial area which spreads to the west side on the Uemachi plateau, the city basis facilities such as the avenue which produces rich scenery are important. Moreover, the trenches or the rivers which leave the personality of Water City Osaka are important. Third, in the residential area which spreads to the southern part and the eastern part on the Uemachi plateau, the neighborhood green of human scale and the living scenery from the old days are attractive. Fourth, the characteristic of the Uemachi plateau and the characteristic of the history are lost. Fifth, in the industrial area which spreads to the estuary part and on the sea, the new viewpoint places such as the tall building and the ship appear and the seaside becomes a valuable viewpoint place.

Keywords: scenery structure, viewpoint, target of view, landform, land use, landscape

キーワード: 風景構造, 視点場, 視対象, 地形, 土地利用, 景観

1. はじめに

21 世紀に入り、成熟型の都市づくりへの転換が求められてきている現在、都市はより一層生活の場としての性格を強め、地域の自然や歴史的な環境に適合した各都市固有の風景を保全・創出していくことが重要になってきている。このような時代背景の中で、景観法が平成 16 年 6 月に公布され、景観計画の策定、景観計画区域や景観地区等の指定による良好な景観の形成を推進することが国政レベルでも位置づけられた。この中で、景観地区においては、建物の形状やデザインに関する計画、地区指定等を住民からも提案できるようになったことに見られるように、住民参画型の景観形成の推進が今後大いに期待されている。このような状況の中で、都市生活者が好ましいと評価する景観の特性を明らかにすることは、今後の住民参画型の地域に根ざした景観形成を考える上で、有意義であると考えられる。

都市景観に係わる既往研究をみると、制度論、手法論、技術論など多方面からアプローチされてきたといえる。このような既往研究の中で、鳴海ら¹⁾が都市の景観構造を名所図会から探り、土地自然に支配されていた近世の景観構造に立脚した景観計画の必要性を述べていることや、篠崎ら²⁾は、江戸名所図会に描かれている歳時記的要素から都市空間を捉えており、各都市固有の景観を形成する上で、都市が立地する地形や歴史、自然の移ろい性などの重要性が指摘できる。また、下村ら³⁾は、市民に好まれる風景を構成する図と地の要素の関係や日変化や季節変化といった移ろい性との関係を明らかにしている。その中で、視点場の特性も若干触れられているものの、好まれる風景と地形分類や土地利用分類との関係が明らかにされておらず、市域全体の風景構造を明らかにするという課題も残されている。

そこで本研究では、都市生活者の視点から評価される風景（大阪市を対象にアンケート調査を通じて得た市民に好まれる景観調査結果）を対象に、好まれる風景を捉えている視点場と視対象となる風景と、それらが分布する地形や土地利用との関係を探るこ

とによって、都市の固有性に大きく影響すると考えられる風景構造の解明を試みるとともに大都市大阪の今後の風景計画の方向性を探ることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象風景の抽出方法

本研究では、大阪市が指定景観形成物指定の基礎資料作成のために市民に対して実施した「わたしのまちの“お気に入りの景観”」調査データ（H.13.12～H.14.2）と追加調査（H.15.12～H.16.2）データを用いた。本調査は“お気に入りの景観”をハガキ、FAX、Eメール、封筒にて募集したもので、各“お気に入りの景観”の場所・名称、魅力の中心とその選択理由について自由記入方式で回答が求められている。なお、このアンケート調査は、調査票のデザインから実施まで筆者の 1 人が市の景観委員会の指定景観形成物指定部会の部会長として係わったものである。

調査対象風景は、1 次調査の有効回答数 604 件に追加調査 294 件を合わせた 898 件・457 景の中から、特定の個人しか利用できない視点場からの 4 景（回答数が 4 件）、視点場もしくは視対象を特定できない 21 景（46 件）をまず除いた。さらに、1 つの景に対して回答者が 1 人である 268 景（268 件）は偶発性や主観的評価に偏る危険性が含まれることから除くこととした。その結果、視点場と視対象が明確にわかり、かつ複数人が回答している 164 景（580 件）を抽出した。これらの好まれる風景の写真撮影は焦点距離 35mm のカメラレンズを用いて平成 15 年 9 月～11 月に実施したものに加え、同様の方法で平成 16 年 8 月に実施した。撮影時の視点場は、自由記入方式での回答内容から特定し、撮影対象（視対象）は「魅力の中心」に記載されている景観の選択理由をもとに特定した。例えば、“お気に入りの景観”の名称が「御堂筋沿道」、場所が「大江橋から見た御堂筋の銀杏並木」、魅力の中心が「日本生命ビル&並木」という自由記入方式の回答から、視点場は「大江橋南詰めの御堂筋東側の歩道上」、視対象は「日本

*大阪府立大学大学院農学生命科学研究科

生命ビルを含めた御堂筋のイチョウ並木」として特定した。なお、高層建築物等の視点場の中で、屋上や階数の記述のないものについては、選択理由が「高層階からの眺望」と記述されていることから一般の人々が入ることのできる高層階のフロアとした。また、城では天守閣、観覧車では最高到達点とした。

アンケート調査における被験者の属性は、性別では男性 537 件、女性 358 件、不明 3 件であり、年齢では 10 歳代が 119 件、20 歳代が 95 件、30 歳代が 199 件、40 歳代が 114 件、50 歳代が 116 件、60 歳代以上が 201 件、不明 54 件であった。

（２）好まれる風景構造の解析方法

まず、好まれる風景は、好まれる風景を撮影した視点場の特性と視対象である風景型の特性の 2 視点から捉えるものとした。

視点場の特性は、その位置を大きくオープンスペース（以下 OS と表記）、乗り物、建築物、道路、橋に 5 分類し、さらに、その場の特性に応じて表－1 の縦軸に示すように 18 分類として捉えた。

風景型は、表－2 に示す 19 分類として捉えた。まず、視対象と視点場との位置関係から、視対象が視点場を内部に取り込んだ景を環境型、視対象が視点場を含まず外部から眺めている景を眺望型、視対象が視点場を内部に取り込んだものから外部から眺めている景までを含んだものを眺望＋環境型、視対象が単一要素の景を単一型の大きく 4 つに分類した。次いで、視対象を構成する要素の特性に応じて、単一型は、巨樹型と城や石碑などの歴史資源型、ビル型、およびそれら以外の人工物型に分類した。環境型は、面的な広がりのある樹林型、線的な並木型、水面型、社寺型、低層の住宅を中心とする家並み型、商業・業務系の中高層のビル群型に分類した。眺望型は、樹林型、水面型に加え、遠景の山並み型、面的に広がる市街地型、山並みと市街地両方を含む山並み＋市街地型に分類した。環境＋眺望型は、水面型、ビル群型、樹林型＋ビル群型に分類して捉えた。

次いで、風景構造の解析は、164 景の撮影位置を GIS（地理情報システム）を用いて地形分類図と土地利用分類図の上に布置し、5 大分類、18 小分類から捉えた視点場と 4 大分類、19 小分類から捉えた風景型の出現数および分布特性から、市民が好ましいと捉えた大阪市域全体の風景構造を探究した。

なお、地形分類は、大阪府発行（1/100,000、1976 年）の土地分類図を用い、埋立地、自然堤防・砂洲、三角州性低地、扇状地性低地、段丘（中・低地）の 5 分類に、河川・水路を加えて 6 分類で捉えた。また、土地利用特性については大阪市発行（1/25,000、2004 年）の用途地域図を用いて、工業系地域、商業系地域、住宅系地域に 3 区分して捉えた。

3. 結果および考察

図－1 は地形分類図上に好まれる風景の視点場を布置したものを示し、図－2 は土地利用類型図上に同じく視点場を布置したものを示している。また、表－1 と表－2 は視点場および風景型と土地利用類型別の地形分類との関係を示している。

（１）視点場の分布特性

表－1 より、まず視点場の分類ごとの出現数をみると、全 164 景中、OS が 60 景と最も多く全体の 4 割弱を占め、次いで、道路が 38 景、橋が 32 景と多くなっている。最も出現数の多かった OS を見ると公園が 25 景と多く、公園が好まれる風景を捉える貴重な視点場となっていることが分かる。また、川辺 16 景と橋 32 景を合計すると河川・水路上あるいは沿川が視点場となって

図－1 好まれる風景の視点場分布状況（地形分類）

表－1 視点場と土地利用系型別の地形分類との関係

視点場	工業系地域					商業系地域					住居系地域					小計	総計
	河川・水路	埋立地	自然堤防・砂洲	三角州性低地	小計	河川・水路	自然堤防・砂洲	三角州性低地	扇状地性低地	段丘（中・低地）	河川・水路	自然堤防・砂洲	三角州性低地	扇状地性低地	段丘（中・低地）		
OS	海辺	-	5	2	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7
	川辺	-	1	1	-	2	-	5	-	-	5	-	4	5	-	9	16
	公園	-	-	-	-	-	3	3	1	1	8	-	2	2	4	9	25
	庭園	-	-	1	1	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	2
	広場	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	2
乗り物	社寺	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	4	6
	小計	-	6	4	1	11	-	9	3	1	14	-	8	7	5	15	35
	電車	-	-	1	-	1	2	3	3	-	8	-	1	2	-	-	3
	自動車	1	-	-	-	1	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	3
	客船	3	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	4
建築物	小計	4	-	1	-	5	2	4	4	-	10	1	1	2	-	-	4
	高層	-	3	-	3	6	-	-	2	-	3	-	-	-	-	-	9
	中・低層	-	1	1	-	2	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	3
	城	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
	観覧車	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1
道路	小計	-	4	1	3	8	-	-	4	-	5	-	-	-	-	2	15
	広幅員	-	1	-	-	1	-	7	2	-	2	11	-	-	-	-	12
	中幅員	-	-	-	-	-	-	6	1	-	2	9	-	-	-	1	10
	路地	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2	-	2	3	-	4	9
	商店街	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	4	-	1	-	-	5
橋	小計	-	1	-	-	1	-	18	3	1	4	26	-	3	3	-	38
	橋	4	-	1	-	5	17	1	1	-	19	5	1	2	-	-	32
総計	8	11	7	4	30	19	32	15	2	6	74	6	13	14	5	22	164

いるものが48景となり、河川・水路が貴重な視点場となっていることが明らかとなり、大阪市の特徴を表していると考えられる。

土地利用類型別の全体傾向をみると、全164景中、商業系地域が74景と5割弱を占めており、次いで、住宅系地域が60景と多く、工業系地域が30景と少ない状況にある。大阪市の中心部に位置する商業系地域は、面積割合が少ないものの好まれる風景が半数近くこの地域から捉えられており、都市活動の集積が影響しているものと考えられる。また、市域の東部や南部に主に分布する住宅系地域に60景も出現している点は、今後の風景計画を考える上で有効に働くものと考えられる。

次いで、視点場の分布特性を土地利用類型をベースに地形分類別に捉える。

商業系地域は、その大部分が上町台地の西側に広がる自然堤防・砂洲から三角州性低地の一部にかけて立地している。この商業系地域では、自然堤防・砂洲を視点場とした風景が32景と突出して多く、同じく上町台地の西側に位置する大川・道頓堀川という河川・水路が19景と多くなっている。突出して視点場が集中している自然堤防・砂洲のエリアは、船場地区と呼ばれ近世からの都心部に当たる。ここでは、高層高密度化していることから、一定以上の幅員を持つ線上の空き空間である道路が貴重な視点場を提供していることが分かる。また、河川・水路上の橋もこのエリアに集中しており、水面が貴重な引き空間となって好まれる風景が捉えられているものと考えられる。

住居系地域は、上町台地を構成する段丘（中・低地）や市の東部に位置する三角州性低地、上町台地西部に広がる自然堤防・砂洲に多く立地している。この内、視点場は、段丘（中・低地）が22景と顕著に多く、市東部の三角州性低地上町台地西側の自然堤防・砂洲がそれぞれ14景、13景と多い。突出して多く視点場が集中している段丘（中・低地）のエリアでは、OSが15景と最も多く、中でも公園が9景と多くなっているが、その大部分は段丘上に位置する大阪城公園である。また、段丘の東斜面に分布する社寺も4景とやや多くなっている。また、道路が5景とやや多く、その大部分が路地である。一方、三角州性低地では、OSが7景と多く、これらは川辺（5景）と公園（2景）に集中しているが、これは大川（旧淀川）との合流地点付近である。

工業系地域においては、埋立地を視点場とした風景が11景と最も多く、河川・水路が8景、自然堤防・砂洲が7景とやや多くなっており、市東部内陸部の工業系地域では視点場がほとんど無いことを示している。視点場の集中する埋立地では海辺とそこに立地する超高層建築物が貴重な視点場を提供していることが分かる。また、客船が3景あり、海上からの眺望も好まれていることが分かる。

（2）風景型の分布特性

表-2より、まず風景型ごとの出現数をみると、全164景中、環境型が64景、眺望型が61景とこれらの風景型がほぼ同程度に多く、単一型が31景と続いている。一方、眺望+環境型は8景と非常に少なくなっている。環境型ではビル群型、樹林型、並木型、水面型が13~15景とほぼ同程度に出現し、大都市にもかかわらずビル群型が少ないのが意外である。一方、眺望型では市街地型が27景と突出して多く、次いで、水面型が22景と続いている。大都市としての特徴と水都としての特徴を表していると考えられる。また、眺望+環境型が非常に少ないことや単一型が多い

図-2 好まれる風景の視点場分布状況（土地利用類型）

表-2 風景型と土地利用累型別の地形分類との関係

風景型	工業系地域					商業系地域					住居系地域					小計	総計
	河川・水路	埋立地	自然堤防・砂洲	三角州性低地	小計	河川・水路	自然堤防・砂洲	三角州性低地	扇状地性低地	段丘（中・低地）	小計	河川・水路	自然堤防・砂洲	三角州性低地	扇状地性低地	段丘（中・低地）	
単一	巨樹型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2
	歴史資産型	-	-	-	-	-	5	1	-	1	7	-	1	-	-	1	2
	橋型	-	-	2	2	1	2	-	-	-	3	-	-	2	-	-	2
	ビル型	-	-	-	1	1	3	2	-	1	6	-	1	1	-	2	4
	人工物型	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1
小計																	31
環境	樹林型	-	-	1	-	1	1	2	-	-	4	-	2	1	1	5	9
	並木型	-	-	-	-	-	7	2	-	2	11	-	-	1	-	1	2
	水面型	-	3	2	-	5	-	2	1	-	3	-	1	-	1	3	5
	社寺型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	3
	家並み型	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	2	-	3	5
小計																	27
眺望	樹林型	-	1	-	-	1	-	-	1	1	2	-	-	1	2	-	3
	水面型	3	4	1	-	8	6	2	-	-	8	3	2	1	-	-	6
	山並み型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
	山並み+市街地型	1	2	-	-	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	2
	市街地型	4	1	1	3	9	2	2	7	-	12	1	-	2	-	3	6
小計																	61
環境+眺望	水面型	-	-	-	-	-	3	-	-	-	3	-	2	-	-	-	2
	樹林型+ビル群型	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	1	2
	ビル群型	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
小計																	8
総計																	164

ことは、風景の多様性を喪失していることを伺わせる。

次いで、風景型の特性を土地利用類型をベースに地形分類別に捉える。

商業系地域においては、上町台地の西側に広がる自然堤防・砂洲上のエリアの全 32 景中、環境型が 18 景と最も多く、その内訳はビル群型が 8 景、並木型が 7 景とこれら両風景型に集中している。次いで、単一型が 9 景と多く、その内訳をみると、歴史資産型が 5 景と多いことが特徴的である。河川・水路上の全 19 景中では、眺望型が 8 景と最も多く、その内訳を見ると水面型の 6 景に集中していることや単一型の 5 景ではビル型が 3 景と多いことが分かる。これらのエリアは船場地区と呼ばれ現在では高層高密度化した市街地であるが、水面型の風景や並木型の風景が多いことや歴史資産型が含まれることから水都としての面影を残していることや並木を伴った幅員の広い道路という都市の基盤施設がある程度整っていることを伺わせている。

住居系地域においては、段丘（中・低地）上エリアの全 22 景中、環境型が 13 景と最も多く、社寺型を除いて多様な風景型が出現していることが特徴的である。一方、このエリアは平坦地形の中にある唯一の微高地であり、社寺が多く立地しているにもかかわらず眺望型の風景や社寺型の風景がほとんど捉えられておらず、既に台地としての特性や歴史的エリアとしての特性が喪失されていることを伺わせている。

工業系地域においては、埋立地上の全 11 景と河川・水路上の全 8 景中、眺望型がいずれも 8 景と突出して多く、その約半数を水面型が占めることは、このエリアが河口部や海上に立地するという特徴を反映している。また、山並み＋市街地型が計 3 景出現し、内陸部での商業系地域では見えなくなった大阪平野を囲む周辺の山系が眺望されていることが特徴的である。

4. まとめ

これまで明らかにした地形や土地利用との関係で捉えた視点場の分布特性や風景型の分布特性を踏まえ、大阪市域という都市全体の風景構造を探った結果、今後の大都市大阪の景観計画に向けた方向性として、以下の 4 点が考察される。

①市域全域における風景構造

- ・各種の OS や河川・水路上に架かる橋梁が貴重な視点場となっている。
- ・風景型の多くを占める環境型や眺望型の中では樹林型や並木型、水面型が多くを占め、特に、河川・水路上に架かる橋梁やそこを渡る車窓は、市民が好む風景を捉える貴重な視点場となっている。
- ・河川・水路の水面は視対象としても貴重である。
- ・近代以降営々と造営されてきた公園も河川・水路に次いで貴重な視点場となるとともに、風景型の中の樹林型に見られるように貴重な視対象ともなっている。

従って、近代以降の都市集積が著しい大阪市域にあって河川・水路は近世に「水の都」と謳われた大阪の個性を継承する風景構造の基盤ともなっている。また、公園も河川・水路同様に風景構造の基盤を担っていると考えられる。

②商業系地域における風景構造

- ・主に上町台地の西側に広がる自然堤防・砂洲上のエリアは、船場地区と呼ばれ近世から続く都心部に当たり、現在も高層高密度化した商業系地域となっており、都市活動の集積によって市民に好まれる風景を捉える視点場が集積している。
- ・当エリアでは、一定以上の幅員を持つ線上の空き空間である道路と近世に造営された堀川が貴重な視点場を提供しているとともに、視点場を内包した環境型の水面型風景や並木型風景として好まれている。

従って、商業系地域では、水都大阪の個性を残す堀川とともに並木を伴った広幅員の道路が当エリアの風景構造を形成しているものと考えられる。

③住居系地域における風景構造

- ・上町台地南部の段丘（中・低地）や扇状地性低地、東部に広がる自然堤防・砂洲にも、市民に好まれる風景を捉える視点場が多く出現するとともに、多様な風景型が分布する。
- ・住居系地域では、共通して公園や路地が格好の視点場を提供しており、ヒューマンスケールの身近な緑や古くからの路地がこのエリアの風景構造の基盤となっている。特に、上町台地上に広がるエリアでは、多様な風景型が捉えられている。
- ・しかし、当エリアで捉えられている風景型は、眺望型ではなく環境型が大部分を占めている点や社寺型が少なくなっている。
- ・そのような中で、上町台地の北端に位置する大阪城を含む大阪城公園には多くの視点場が集積し、台地の北部に広がる三角州低地では大川（旧淀川）の合流地点に視点場がやや集中している。

従って、住居系地域では、中遠景を捉える眺望型に適した段丘（中・低地）上の台地の特性や社寺型といった歴史の特性が喪失されてしまっていることが伺え、大阪の都市風景の固有性を発揮する上では大きな損失といえる。しかし、大坂城周辺エリアは、平坦地が大部分を占める大阪において風景構造を特徴づける上町台地を象徴し、風景構造上の貴重なエリアといえる。また、台地北部の三角州低地における視点場の多さは、上町台地との境界部にあって、地形の変局点の重要性を伺わせている。

④工業系地域における景観構造

- ・工業系地域の中の河口部と海上に広がる埋立地のエリアでは、まだまだ好まれる風景が少ないものの超高層建築物や船上といった新たな視点場が出現している。
- ・また、大阪平野を取り囲む周辺山系を視対象とした眺望型の風景が捉えられている。

従って、工業系地域の中でも特に埋立地では、超高層建築物や船上といった新たな視点場の出現と周辺山系を望む眺望型の風景が、大阪の風景構造を特徴付けるものといえる。

以上のように、上町台地の特性や歴史の特性が一部失われているものの、現在の都市生活者からの目を通じて、近世の水都大阪を支えた堀川や大川（旧淀川）の合流点とその南側に広がる大阪城公園に代表される段丘（中・低地）で形成された上町台地が今なお大都市大阪の風景構造の基盤をなしているといえ、これらを基調として都市全体の風景の再統合化や文脈の回復を図ることによって、失われつつある都市の個性が再生できるものと考えられる。一方、近代以降営々と造営してきた並木を伴った広幅員の道路や公園、海辺や河口部に展開する埋立地での超高層建築は、風景構造の新たな基盤をなしているものであり、これらを基調として都市全体の風景の統合化を図ることによって、混乱した都市の風景に一定の秩序を与えることができるものと考えられる。

引用・参考文献

- 1) 鳴海邦碩・久隆浩・橋爪紳也・大西ニ州（1988）：『浪花百景』に描かれた近世大阪の都市景観構造に関する考察：日本都市計画学会学術研究論文集 23, 223－228
- 2) 篠崎伸・志摩邦雄・小柳武和（1998）：歳時記的要素に配慮した都市の空間構成に関する研究－「ひたち都市環境写真コンテスト」応募作品と「江戸名所図会」の分析－：日本都市計画学会学術研究論文集 33, 727－732
- 3) 下村泰彦・有本幸代・王蕊・増田昇（2004）：大阪市における市民に好まれる風景の空間構成および移ろい性に関する研究：日本造園学会ランドスケープ研究 67(5), 619－622